

友よ 第九回

赤神 諒



第九章 誰のために

——天正十三年（一五八五年）七月、阿波国・一宮城



山麓から吹き上げてくる夏風が焼けるように熱いのは、真夏の日差しよりも、人間を殺すために集う者たちが作る人いきれのせいらしい。

谷彦十郎は引き金を引いた。

みよとじんまる
明神丸の直下へ潜り込もうとする敵足軽が倒れた。この日、射殺したのは四人目だ。一度も外していないが、敵は無数にいた。

友よ 第9回

一宮城本丸の虎口こぐちからは、城を幾重にも包圍する敵を見渡すことができた。羽柴秀長率いる五万の大軍勢である。

壯観とも言える威容はそれでも、阿波、讃岐、伊予の三方面から同時に四国へ侵攻してきた秀吉軍の一角に過ぎない。対する長宗我部軍は、石垣作りの堅固な一宮城に五千の将兵で籠城し、徹底抗戦を続けてきた。

昨年、長宗我部は十河城としかしろをも攻略して讃岐を制圧し、十河存保ながやすは落ち延びて秀吉を頼った。長宗我部と徳川の同盟も成り、西の伊予でも南予の西園寺公広さいおんじきんひろが降った。だが、小牧・長久手の戦いを経て家康が秀吉と講和すると、勝機は一気に乏しくなった。この春には伊予の河野家をも降して長宗我部はついに四国を統一したが、六月には秀吉の大軍勢が侵攻してきたのである。

「彦十郎よ。椎ノ丸しいのまるをもう守りきれんと、江村殿えむらが言うてきた」
背後から疲れた声が近づき、父の忠兵衛が隣に立った。

髪には白いものが混じっている。そろそろ彦十郎が谷家の当主となるべき年齢だ。神官に拘こたわるのはやはりわがままなのだろう。いや、敗北の確実な戦を前に、無意味な自責か。

二人とも戦が始まってから五日ほど、ろくに仮眠も取っていない。これほど長く父と一緒に過ごしたのは、幼き日以来だった。

「しばらく私が椎ノ丸を代わりまする」

南北に長い一宮城では、谷忠兵衛と江村親俊ちかとしの二将が死守を命ぜ

友よ 第9回

られていた。敵は、彦十郎の守る北の明神丸を簡単に落とせぬと見たのか、南の椎ノ丸に攻撃を集中させつつあった。

「江村殿の顔をこれ以上、潰すわけにはいかん」

僚将の江村親俊は勇敢な将だが、余りに敵が多すぎた。種々の名目で持ち場を交代しながら、彦十郎が落城を回避してきた。

「将の面目なら、後で取り戻せ申す。されど椎ノ丸を奪われれば、水の手を断たれまする」

一宮城内には滝と小さな池まであり、本来は五千の兵が籠城しても困らぬほど水は豊富だった。秀吉軍の侵攻に備え、兵糧と弾薬も二年分用意してある。かねて誼よしみを通じてきた薩摩の島津家に頼み、鉄砲の援助も受けた。

「こたびは、いつかやってきた仙石某などは、格が違う。敵将は粒ぞろいじゃ」

秀吉の弟で攻め手の総大将、羽柴秀長は名将だった。その下で蜂須賀正勝かまさかつ、藤堂高虎とうどうたかとらら錚々たる将たちが武功をあげんと攻め寄せていた。

長宗我部軍が万全の態勢で頑強に抵抗すると、秀長は金に任せて人足を雇い、城内に通ずる坑道いしうすを掘って侵入しようとした。彦十郎はこれに気付くと、台所の石臼いしうすやら竈かまどを転がして穴を塞いだ。次に、城内へ潜入して本丸と他の曲輪くるわを分断しようとする敵が現れると、るいに見つけさせ、鉄砲隊で射殺し続けた。

友よ 第9回

だが勝敗は最初から見えている。この籠城戦は、敵を攻めあぐねさせることだけに意味があった。

「しばし椎ノ丸へ出張るぞ」

彦十郎が実戦の中で鍛え上げた鉄砲隊に声を掛けた時、濃鼠こいねずの柄な影が現れた。るい、だ。

「江村勢、椎ノ丸より撤退を開始いたしました」

聞こえるように舌打ちをすると、忠兵衛がたしなめるように彦十郎の肩に手を置いてきた。

「皆がお前のような戦上手ではない。木津城きづじょうも、岩倉城いわくらじょうも、脇城わきじょうも落ちた。もはや、残された手はひとつきりじゃろう」

彦十郎はすぐ北を流れる鮎喰川あぐいがわの流れを見た。

ふと、信親がいたら、何を言うだろうかと思った。

いつも朗らかなあの若者は、周りにいる者たちの気持ちをほぐし、どんな時もパツと場を明るくした。元親は今回、信親の出陣を許さず、岡豊城おかこうじょうの留守居をさせていた。信親がこの城にいたなら、椎ノ丸も簡単に陥落しなかったろうが、やはり他の城は敵に攻め落とされてきた。さして、結果は変わらぬか。

銃声けんげきや剣戟けんげきの音が治まり、辺りが静かになった。

山麓を見下ろすと、攻め寄せていた敵の将兵が射程圏外へ引いてゆく。引き際の采配も見事だ。

「秀長が降伏勧告をして参りますな」

友よ 第9回

椎ノ丸を制して水の手を断った以上、長宗我部方には勝ち目がなくなかった。いかなる条件を出してくるかが問題だが、命懸けで抗った意味はあると信じたかった。

「わしが白地城はくちじょうへ行こう。土佐一国の安堵が得られるなら、降伏すべきじゃ」

故国土佐が奪われるのなら、最後まで抗う。一宮城の戦いで、秀長は長宗我部の力を悟ったはずだ。勝手知ったる土佐の地なら、抵抗はさらに激しくなる。これ以上の犠牲は避けたかろう。秀吉の器量なら許すはずだと考えて、彦十郎も忠兵衛も戦ってきた。

長宗我部はひたすら運に恵まれなかった。

それだけの話だ。だが――

「父上では、御館様おやかたさまを説き伏せられますまい」

もともと秀吉は土佐一国の安堵を条件として従属を迫ってきたが、元親はこれを一蹴した。家臣団の意見は分かれたが、忠兵衛らの反対を押し切り、元親自らが「天下の勢を受けること、武士の本望にて候」と宣言し、徹底抗戦と決したのである。

「親信殿が、生きておられればの」

彦十郎の師である久武親信は先年、有馬ありまへ湯治に行ったとき、同じく静養に来ていた秀吉に偶然出会ったという。その人物を知った親信は恐れ、光秀から秀吉への乗り換えを元親に打診したほどだ。

もともと忠兵衛は神官に戻るつもりで土佐統一までの仕官を約し

友よ 第9回

だが、暇乞いをしそびれたまま、親信の戦死によりその後任を担わざるを得なかった。だが事ここに及んでは、親信の進言でも元親は聞き入れまい。

「今、長宗我部を滅びから守りうる御仁は、ただ一人でござる」

彦十郎は^{ねぎら}勞うように、忠兵衛の背をさすった。

瘦せて骨ばって、老いを感じさせる背を寂しく思った。もしも滅亡を免れたなら、信親を見習って孝行でもしてみるか、柄にもないことまで考えた。

「わしの、最後のお役目になるかのう」

忠兵衛が隠居したがっている話は、本人からではなく元親から聞いた。息子には直接言いくかったらしい。

彦十郎が珍しく微笑み返すと、忠兵衛が驚いたように目をしばたかせた。

「ご案じ召さるな。わが友なら、必ずや皆を救ってくれましょう。されば——」

彦十郎が傍らを見ると、忠兵衛も頷いて、るいに頭を下げた。

「多くの人間の命が懸かっておる。頼めるか」



「忠兵衛、何をしに戻って参った?!」

冷静沈着な元親が怒鳴るのは、信親が危地に陥った藤目城攻め以

友よ 第9回

来か。

「五千の精兵で要害に籠城し、敗れ去ったなら、腹切って主君に詫びるのが筋であろう」

怒気収まらぬ様子で元親は声を震わせていた。口を開く前から忠兵衛が白地城へ戻ってきた理由を承知している。

「城を飲み込む大軍に名将が揃い、一宮城はまさに落城間近。面目次第もございませぬ」

忠兵衛は改めて深々と平伏した。

「羽柴が引いておるのなら、その油断を突く隙もあるう」

「ございませぬ」

「なぜわかる？」濃鼠の鉄扇の先が、刺すように突き出された。

「逆の立場なら、われらも油断いたしませぬゆえ」

兵力が互角なら、長宗我部も決して負けはしない。だが、絶望的な兵力差だった。

「情けなや、忠兵衛。長宗我部の忠臣は、金子のみであつたと申すのか」

伊予の降将・金子元宅は、東予から侵攻してきた秀吉方の毛利軍三万を、二千の兵と共に迎え撃って敗れ、高尾城で切腹して果てた。

「戦はまだ始まったばかりじゃ。この白地城から、知悉せる土佐の山野へ敵を引き込む。随所に伏兵を置き、一城で千人を討てば、敵の進軍を止められる。薩摩から島津に援軍を送ってもらう。秀吉が四国に

友よ 第9回

手こずっておると知れば、徳川が変心して背後を突くやも知れぬ。和議なぞ口にすれば、斬って捨てるぞ」

珍しく冷静を欠く主君に対し、忠兵衛はあえて沈黙した。

聞こえるのは、城東を流れる吉野川の音だけだ。

白地城を守る八千の兵が妙に物静かなのは、ひたひたと近づいてくる死を覚悟しているせいか。

「一宮城へ戻り、戦を続けよ。土佐武士の死に様、上方の連中かみがたにとくと見せつけてやれ」

平伏したまま、忠兵衛は微動だにしなかった。

「なぜ、行かぬ？」

忠兵衛はゆっくりと身を起こし、正面から元親を見た。

「水の手が切られた一宮城を守ることは叶いませぬ。某どもが死んで、土佐武士の意地を見せたとして、ごまめの歯ぎしりにすぎますまい」

「ああ、久武親信さえ生きてあらば、かような体たらくになってはおらぬ」

「某は親信殿から後事を託されし身ゆえ、約した以上は果たす所存。されば畏れながら、この城にある家臣団の皆で、和議と決ましてござりまする」

元親が鉄扇を床に叩きつけた。

「不屈きな手回しをしておって。そちらは余に従えぬと申すか」

「主君が過あやまてる時は、命を賭してお諫めするが、家臣の道と心得て

友よ 第9回

おりまする」

元親は立ち上がって、刀立ての太刀を引っ搦むと、鞘を抜き放って、捨てた。

忠兵衛の眼前に、太刀の切っ先が突き出される。

「一宮城でのうて、ここで死ぬか、忠兵衛？」

改めて居住まいを正すと、忠兵衛は元親と睨み合った。

どれほど悔しかろう。長宗我部はことごとく運に恵まれなかった。共に歩んできたから、痛いほどよくわかる。忠兵衛も、悔しくて堪らぬのだ。

元親の目を見ながら、忠兵衛は微笑みを浮かべ、こくりと頷いた。

「ご命とあらば、いつ、どこにても。お約束通り土佐神社を再興賜りしうえは、元より覚悟——」

元親は音を立てて刀を鞘に納めながら、遮ってきた。

「去れ、忠兵衛。神官に戻るがよい」

「生憎その機は逸あいにくしました。御館様が滅びの道を選ばれるなら、共に滅びましょう。類稀たぐいまれなる土佐の英傑、長宗我部元親の懐刀として、大いなる戦を始めた者として、四国の民に対し小さからぬ責めもございますれば」

「責めは余が死して負うほかあるまい。なぜそなたは共に死ぬ？余のもとを去らぬ？」

何の巡り合わせか、忠兵衛は人生の多くを、同じ時、同じ場所で元

友よ 第9回

親と共に過ごしてきた。共に悩み苦しみ、喜び、楽しんできた。そして今、その大半が水泡に帰した、万感無念の思いを共にしている。この狂おしい感情を、何と呼べばよいのだろうか。そうか……

はたと気づき、忠兵衛は元親に向かって両手を突いた。

「うまく申し上げられませぬが、若殿のお言葉をお借りするなら、友、なのやも知れませぬ」

「友、じゃと……」

急流が突然、深い淵に差し掛かったように、元親の表情が初めて和らいだ。

忠兵衛はこの二十年ほど、ずっと元親のそばで苦楽を共にしてきた。今ここで、滅びようとする友を見捨てられはせぬ。それだけの話だ。結局神官に戻れなかった理由も、同じだったのだろうか。

元親は背を向けてから、ぼそりと問うてきた。

「忠兵衛よ。もしも今降るなら、余はこれまで、何のために皆の尊き血を流してきたのだ？」

いかなる返答も受け付けぬように、元親は奥ノ間へ消えていった。やがて、背後で足音が聞こえた。

「やはり難しゅうござるか」

心配そうに問う石谷頼辰いしがいよりときに対し、忠兵衛は小さくかぶりを振った。

「いや、手は打ち申した。御曹司がどれほどの人物に成長しておられるか。長宗我部の命運は、それで決まるはず」

友よ 第9回

滅びの瀬戸際にいるというのに、忠兵衛の心はなぜか安らぎを覚えていた。



岡豊城の詰城から南を眺めると、夏日に煌めく石清川の眩しきには目を細めるばかりだ。

二年分の兵糧とほぼ無尽蔵の矢弾を蓄えてあった。最終決戦はこの城で行われる。

——だが、勝ち目はない。

先月から始まった戦では、伊予、阿波、讃岐から、敗報が次々と伝えられていた。

秀吉との戦を、信親は忠兵衛らと共に反対した。織田との戦いでは、毛利を始め信長の敵が少なからずいたが、今回は皆無に等しい。だが、最後は元親の決断に従うほかなかった。今の長宗我部は、元親が一代で築き上げたのだ。

「信親さま、小滝が小舟でそのまま眠っております」

澪が微笑みながら、露台にやってきた。

幼い頃、信親は川舟が好きで、なかなか降りようとしなかった。元親はある日、信親に小さな木舟をくれた。船底に低い段差を設けてあり、ガタンゴトンとわずかに上下するのが楽しくて、信親は大いに気に入った。

友よ 第9回

「母上の話では、俺も昔はあの小舟でよく眠ったらしい」

「まあ、やっぱり小滝は信親さまの子ですね」

一昨年、漣との間に生まれた女子は、亡母に因んで小滝と名付けた。

「すまぬな、漣。もしこの城が大軍に包囲されれば、俺はそなたたちを守りきれぬ」

三方から四国に攻め入った羽柴勢は、十万を超えるとされていた。

「信親さまとご一緒なら、どこへでも従ついて参ります」

漣は主家の明智家を秀吉に滅ぼされ、今また嫁ぎ先の長宗我部家を同じ秀吉に滅ぼされようとしていた。悔しかろう。

奥から小滝の泣き声が聞こえてきた。乳母が面倒を見ているが、漣も信親も、赤子の世話をむしろ楽しんでいた。

「腹が空いたのではないか。昨日は鰻うなぎを美味そうに食べておったが」
焼いた鰻を細かく刻んで柔らかい飯と共に食わせると、小滝はもつとくれとばかり、両手を挙げて喜びを表した。

「信親さまのお子ですもの、もちろん大好物です。焼き始めたら、匂いを嗅いだけで、すぐに泣き止むでしょう。台所で支度をさせて参ります」

ふたりで中に戻るや、小滝が泣きながら駆け寄ってきた。

両手で抱き上げると、小滝はすぐに泣き止み、笑顔でしがみついてくる。元親も昔、子煩悩で、幼い弥三郎をよく抱いていたらしい。

頬擦りをする、赤子の良い匂いがした。わが子の寿命はあとどれ

友よ 第9回

ほど残っているのか。物心つかぬうちに戦で命を落とす運命を、小滝はまだ知らない。不憫だと思った。

小滝をあやしなから、信親は床の間に立つ猿猴へ目をやった。籠城戦を一緒に戦うつもりで、出丸に飾ってあった弥次郎の猿猴の竹細工も持ってきた。小滝に壊されぬよう、高い所へ置いたほうがよさそうだ。

抱かれるのに飽きたのか、おずかり始めた小滝を下へ降ろしたとき、信親は背後に人の気配を感じた。

振り返ると、庭先に濃鼠の忍び装束が片膝を突いていた。

「久しぶりだな、るい」

おそらくは信親にしか見せないあの笑みを、女が浮かべている。

「長らくのご無沙汰、申し訳ございませんね」

自らの意思で、るいは信親に会おうとしなかった。長宗我部によって運命を翻弄ほんろうされ続けた愛しい女は今、仇の長宗我部を救うために奔走している。

「今まで、どこにいた？」

「阿波一宮城にて、秀吉軍と戦っております」

彦十郎が忠兵衛たちと籠もり、熾烈な籠城戦を展開する最前線だ。るいは夜通し駆けて、彦十郎あたりの伝言を持ってきたのか。

頬かむりを取り去ったるいが、少し伸びた髪を夏風になびかせている。

友よ 第9回

長宗我部が滅ぼした一族の末裔だ。まつえい 信親にとって義理の叔母に当たる初恋の女だが、今も愛していた。

「信親さま。皆のため、どうかお力をお貸しくださりますせ」

互いに見つめ合った。るいの心は、誰よりもわかっているつもりだ。

「戦を止めるのだな？」

「御意。白地城へお供つかまつります」

るいほど頼もしき警固も少なからう。

「わかった。すぐに支度しよう。至誠、天に通ず。俺が父上を止めてみせる」



四

白地城の天守から眺める吉野川は昨日と毫も変わりなく、あまた 数多の支流を集めながら悠々と流れていた。

元親の決断如何で、いかん ほどなくこの川は赤く染められ、骸が無数に浮かぶだろう。だがそれでも然るべき時が経てば、何も起こらなかつたように、今日と同じような流れに戻るのだ。

土佐に源を持つ吉野川は、やがて大河となって海へ注ぐ。その地まで元親は辿り着き、征したはずだった……。

手中の鉄扇で、左の掌を打った。

思ったほど小気味良い音はしなかった。掌を見る。

この手は、どれだけ血で汚れていることか。

友よ 第9回

八年前にへ四国のへそ〜と呼ばれるこの城を制したとき、元親は吉野川のごとき大きな流れとなって四国を平定せんと誓った。近くに
ある雲辺寺うんべんじの住職・俊崇坊しゆんそうぼうが「薬缶やかんの蓋では水瓶の蓋は覆おえず、元親は土佐一国の器たるべし」と野心を諭すと、元親は「余は四国を覆う蓋たらん」と返したものだ。

だが元親は、運に見放され続けた。

早くから誼を通じていた信長からは掌を返された。光秀と結んで天下を窺うはずが、盟友は呆気なく討たれた。秀吉に対抗すべく結んだ柴田勝家しばたかついえも滅ぼされた。秀吉に勝利した暁には、四国に加え、淡路・摂津・播磨の三ヶ国を領すると約して同盟を結んだ徳川家康も、途中で秀吉に降くだった――。

敵も味方も皆、元親が四国統一の野望に心を焦がしてきたと思っ
ていよう。だが、違う。元親はこれまで、自分のために戦をしたこと
は一度もない。

最初は亡父国親くにちかへの想いから、無我夢中で戦った。志半ばで死んだ父の遺志を継ぐべく必死で近隣を従えようとした。滝と結ばれてからは、滝を守ろうとして戦った。はるばる京の都から土佐の片田舎へ嫁いできた滝は、いかなる時も決して微笑みを絶やさず、元親を裏で支え続けてくれた。途中からは、二人の間に生まれた信親のためにも戦った。

元親の野望は元来いたって、ささやかなものだった。

友よ 第9回

——四国を統一し、滝を京の都へ連れ帰る。

荒れ果てた妻の故郷をわが手で蘇らせれば、滝は喜ぼう。民が滝にどれほど感謝するだろうか。別に頼まれたわけではない。元親が滝にそうしてやりたかっただけだ。

滝が病を得てからは、湯治させたいと願い、道後温泉のある伊予攻略を急がせた。薬師くすりしが手の施しようがないと匙さじを投げると、京を征して、天下の名医ごと手に入れんと目論みさえした。滝は四国一、いや、日本一の女性にょしやうだった。政略結婚で得た妻を気に入らねば、側室を置くつもりだったが、滝は武家の室の鑑かがみだった。

連れ添って二十年、元親は滝に対し、ただの一度も不満を覚えたことはなかった。滝のすべてを好きだった。滝は元親の宝だった。だが、救えなかった。滝が死ぬと、心に大きな穴ができて、戦どころではなくなった。そのために、秀吉が膨張してゆく大事な局面で兵を動かせなかった。誰にも明かした覚えはないが、元親は滝の笑顔を見るために、戦い続けてきたのだ。

妻亡き今、元親に遺されたのは信親だけだ。滝に生き写しの信親は、好ましい親孝行者に育った。

父の国親は、幼少の頃から元親だけを特別に扱い、愛情を一身に注いで育てた。弟たちは優れていたが、最初から家臣として元親に尽くすべく育てられた。この国親のやり方は見事に当たり、元親は結束する有能な家臣団を率いて、長宗我部を急成長させた。

友よ 第9回

ゆえに元親は、国親と全く同じように、信親と他の子を分け隔てしながら育てた。他の七人の子らは、信親のための道具に過ぎぬ。娘たちは政略で嫁ぎ、息子たちは兄の信親に忠誠を尽くすべきだ。元親のすべての戦いは、滝と信親のためだった。冷酷非情に徹しながら野望を煮え滾^{たぎ}らせてきたのも、滝を喜ばせ、信親に大きな遺産を引き継がせてやるためだった……。

だが、本当にそうなのか。

元親も、秀吉との戦いには勝てぬと知っていた。信親のためを思うなら、忠兵衛が命を賭して諫めるように、秀吉に降るべきではないのか。なのに、誰のために元親はまだ戦い続け、滅びを選ぶ^{えら}ぼうとしているのだ。元親は今、初めて自分のために戦っているのか。いや、これまでもそうだったのか……。

「御館様、よろしゅうございまするか」

忠兵衛の声だ。一宮城から戻って三日目になるが、元親がどれほど叱り飛ばしても、猫顔は延々と説き続けた。いかなる人間も憤激し続けてなどいられまい。もともと元親は、冷静沈着で有名な人間だ。根負けした元親は、忠兵衛ら家臣たちの説得を黙って聞いていた。いや、実はろくに聞いていなかった。

元親は何のために、誰のために戦うのか、ただそれだけを考え続けていた。

異国で死んだ福留親政と久武親信の顔が浮かんだ。一条内政を滅

いちじょうただまさ

友よ 第9回

ぼす生贄となった波川清宗はかわきよむねの人の良さそうな笑顔も、思い浮かべた。多くの犠牲により得たものすべてを失うなら、いったい元親は何のために戦い、皆を死なせてきたのか。この戦いはもう、利害得失ではない。誇りでも、意地でもない。では、何のためだ。

呼びかけに元親が答えないでいると、忠兵衛が「御免」と勝手に入ってきた。

「これ以上説いても無駄だ。同じ人間の同じ言葉には、同じ意味しかない」

猫顔が微笑みを浮かべている。頭の白髪が目立つ。

忠兵衛も齢を取った。元親もか。

「されば、違う言葉をご用意いたしました。若殿が岡豊城よりお越しにございまする」

なるほど、奥の手を使ってきたわけか。忠兵衛は元親の心を誰よりも知っている。だが、どうやら元親は、信親のために戦っているわけではないようなのだ。話を聞いても無駄だろう。

振り返ると、深礼して去る忠兵衛と入れ代わりに、白銀べにいとわどしに紅糸威べにいとわどしの具足を身に着けた若者が現れた。

信親が恭しく平伏する。実に美しい仕草だ。息を吸いつつ上体を前傾させ、動きを止めて息を吐き、再び息を吸いながら元の姿勢に戻る。

〈礼三息れいさんそく〉を見事に会得していた。

「面おもてをあげよ」

友よ 第9回

完璧な信親の座礼は、相對する元親と自然に息が合わせてあった。幼少より修得させた小笠原流の礼法が完全に身に沁みついている。

実に立派な将となった。立つと、見上げねばならぬほどの偉丈夫だ。まだ二十一歳だが、幾つもの戦を経験し、様々な辛酸も舐めたせいか、齡に似合わぬ風格まで身にまどっていた。

「お前には、岡豊城の留守居を命じておいたはずじゃが」

「守りは万全にございます。されど、長宗我部最強の信親隊がおらぬせいで、何とも不甲斐なき戦をしておるとか。味方の士気を鼓舞せねばと、陣中見舞に美味い鰻を持って参りました」

信親が微笑んでいる。戯れ言をぬけぬけと。

もともと信親はこの戦に反対していた。忠兵衛に乞われて出てきて、いかに説くつもりなのか、楽しみな気もした。まずは天下の趨勢から論じ、一宮城の苦境あたりから説き起こすか。だが、そんな話なら百も承知で、聞き飽きている。

元親は脇息に両肘を突きながら、すっかり遅くなったわが子を見た。

「父上。わが子は愛しいものにございまするな」

信親の子は女子だが、祖父である元親にとっても可愛いに決まっている。岡豊にいる間は何度か腕の中に抱いた。亡き妻にあやかった命名だからか、特に愛着が湧いた。

「先だって、初めて小滝が鰻を食しました。子が美味そうに物を食べ

友よ 第9回

る姿は大好きでござる」

裏表のない信親は、見ているほうも自然に笑みが浮かんでくるほど、嬉しそうに鰻を食べる。

「それがしが初めて鰻を食べた時のことを、父上は覚えておられますようや？」

思索してみた。だが幾星霜いくせいそうも重ね、全く思い出せぬ。

信親は微笑んだままで続ける。

「あの時は、隼人が幼い私の口の中へ焼きたての鰻を入れたのです。まだ熱すぎたせいで、舌を火傷しました。火の付いたように私が泣き出すと、父上がそれは恐ろしい剣幕で、隼人を叱り付けられました。私は父上を初めて怖いと思いました。火傷より父上が怖くて、鰻を食べられなくなったのです」

隼人がまだ元服前のころか。そういえば、傅役もりやくの福留親政と久武親信も交え、酒を飲みながら鰻を食していた時の話だ。どこかのきれいな河原だった。

「以来、隼人は責めを感じたのか、何とか私に鰻を食べさせようとなりました。私も食べようとしたのですが、勝手に体が震えてくるのです。そんな折、忠兵衛が風変りな団子を持って参りました。香ばしくて美味で、幾つも食べました。私の大好物になった後、鰻の団子だと忠兵衛が明かしたのです」

思い出した。昔、信親が鰻を食せるようにと、そんな小さなことを

友よ 第9回

大人たちで額を突き合わせ、思案していた時期もあった。あの頃いた腹心で、まだ生きているのは忠兵衛だけか。

「ある日、物部川の河原で、父上が隼人の披露した武技を手放しで褒められた後、皆で鰻を焼いたのです。なぜかその日は食べられるという確信がありました。隼人が細かく刻んでくれた鰻を食べた時、世にこれほど美味しいものはないと知り、以来、土佐の鰻を食べ尽くす勢いにございまする」

信親が白い歯を見せて笑うと、元親も釣られて軽く頬を緩めた。

「父上は昔、私がよく遊んでおった小さな木舟を覚えておわしまするか」

いつまで昔話を続けるつもりだ。

この春、小滝を乗せてやりたいと、信親が居館の蔵から古い木舟を取り出して、何やら賑やかにしていたのを思い出した。

「あれは、父上が私のために作ってくださったものでした」

城下の木地師と共に作ったが、元親は慣れぬ槌つちを誤って自分の指に打ってしまい、ひどく腫れたものだ。しばらくは滝が箸で食事をさせてくれた。懐かしい思い出だ。

「小滝もあの木舟を大好きで、離れようといたしませぬ。あんまり気に入って、乗ったまま眠ってしまうほどでございまする」

そういえば、信親も同じだった。夢中で遊ぶその姿勢のまま、眠っていた。

友よ 第9回

「世に子の寝顔ほど愛おしいものもあるまいと、子を持って、初めて知りました」

信親は真剣な表情で、元親を正面から見た。

「るいを遠ざけられた時は、悲しくてなりませんでした。父上が波川家を滅ぼされ、わが友弥次郎を死へと追いやられた時、私は父上を初めて憎いと思いました」

父の国親が香宗我部を滅ぼした時、元親も父を恐れた。もともと父子の仲は、元親と信親のようにすこぶる良かった。今にして思えば、国親はあの時すでに不治の病を患いながら、隠していたのだろう。あの国親の謀略も、わが子元親のためでしかなかった。実際、香宗我部家乗っ取りから四年もせぬうちに、国親は病没した。

「まだ言葉も解せぬわが子なれど、娘を持って、わかりました。父上が戦を続け、時に汚名を被られてきたのは、ご自身のためでなく、私のためであったのだ、と」

元親も信親という子を持ち、育てるようになってから、死んだ国親の所業の意味を解した。だから信親には手を汚させまいと考えた。代わりに、元親が手を汚してきた。

「母上の私へのご遺言を、漣から聞きました」

滝を思うと、未だに胸が強く締め付けられる。もしも滝が生きていたなら、滅亡へと突き進む元親を止めるだろうか……。

「民と、家臣たちと、兄弟姉妹と、長宗我部の行く末を私に委ねた後、

友よ 第9回

母上はもう一人、父上を頼む、と遺言されました」

滝は遺してゆくわが子に、夫の行く末を託したのか。

「これまで私は、ずっと父上に守っていただきました。けれど、これからは、私が父上をお守りいたします。岡豊を出るに当たり、母上の墓前で約して参りました」

もう、信親の時代か。この戦の前、忠兵衛も隠居を口にしていたが、元親も頃合いやも知れぬ。

「以前、物部川に猿猴が出るとの噂が流れたのをご存じでございましょうや。私は皆と共に探しに出かけ、猿猴を見つける代わりに、民の涙を見ました」

夕暮れの川で、信親たちは必死で逃げようとする猿猴の小柄な背を追いかけたという。

見失いかけた時、猿猴の行く手に陸路で先回りした資吉と二蔵が立ちはだかった。観念した猿猴は、川の中にへたり込んだ。資吉が緑に染めた頭巾を取り去ると、現れたのは緑の筒袖を着、顔も緑に塗った、航八こうはちという少年の祖父だった。猿猴の噂を流して人を集め、近くの川べりで小魚を焼いて売り、端金はしたかねを落とさせる魂胆だったという。夏になって少し人気ひとけが減っていたが、御曹司が猿猴を見たとなれば、また人が来ると考えたらしい。

「人騒がせな真似を」と二蔵が詰め寄ると、老漁師は逆に訴えた。毎年の戦で、働き手は戦に駆り出され、死んで戻って来ない者もいる。

友よ 第9回

兵糧供出のために、民は食うや食わずで日々を過ごし、病でなく飢えで人が死んでいると、信親たちに切々と訴えた。

「草の汁で緑に塗った老翁ろうおうの、皺だらけの泣きっ面を見た時、私は乱世を終わらせねばならぬと強く思いました」

信親は民の痛みをわが事として感じている。昔は元親も民と親しく交わったのに、戦に明け暮れるうち、いつしか民の笑顔を確かめるのを忘れていた。代わりに信親がやってくれていたわけか。

「吉野川のこの辺りに来ると、七年前の初陣を思い出しまする」

名もなき将が、寡兵で大軍相手に苛烈な玉砕戦を演じてみせた。あの若者のために、長宗我部の讃岐攻めは変更を余儀なくされた。

「父上はあの折り、抗おうとする新目弾正を無謀なりと一笑に付されたはず」

元親が今まさに、四国全土を舞台に新目と同じ真似をしていると言いたいわけか。

「新目の者たちが、一人残らず弾正に殉じたように、われらは覚悟を決めております。この戦いに意味があるのなら、どうぞ死をお申し付けくださりませ」

元親は小さく笑った。わが子の成長が、嬉しかった。

——信親め、腹芸ができるようになりおった。

「父上はこれまで、皆を守るため、戦のない国を作るために、戦い続けて来られたはず。なればこそ私はもちろん、土佐の民も、家中の者

友よ 第9回

「たちも皆、従いて参りました」

最初は目の前の敵から、家族や家臣、民を守ろうと戦ってきた。だが、いつまでも戦いは終わらなかった。より大きな敵に攻め滅ぼされぬためには、戦いを続けるしかなかった。気づけば、戦うために戦っていたらうか。

「長宗我部は今、かつて四国の何人も手にしえなかった大きな、大きな力を持っております。それは、私の敬ってやまぬ父上が、一代で築き上げられし、偉大な力でございまする」

「いったん信親はひと息吐いて、言葉を切った。

だが、天下の勢の前には敗れ去る、弱き力ではないのか。

信親は正面から、元親の目をまっすぐに見た。

「その力は、長きに続いた四国の戦を、すべて終わらせる力にほかなりませぬ」

元親は背筋に涼やかな気を感じた。

一枚岩の長宗我部が本国の土佐で、有能な将たちの采配のもと勇猛なる一領具足と共に籠城戦に入り、国が焦土と化すまで徹底的に戦を続けるなら、最後は負けるとしても、まだ当分戦は終わるまい。

「海に囲まれた四国なら、ひと足先に、太平の世をわれらが手に握むこともできましよう。四国乱世に終焉をもたらす力は、長宗我部家の当主のみが持つ、大いなる力でございまする」

天下の勢を受けんとする心意気が武士の本望だとしても、それは

友よ 第9回

しよせん元親だけの話か。

「されば父上、折り入ってお願い申し上げたき儀がございます」
信親が改めて元親に向かい、両手を突いた。

わが子の背筋はゆるぎなき一本の直線でありながら、限りなく伸びのある柔らかさを宿している。

「長宗我部の家を、私に下さりませ」

元親は瞠目どらもくして、信親を見た。

「いずれ私に下さるのなら、今、私に下さりませ。さすれば、長宗我部の行く末を決めるのは、当主の私にございます」

元親は滝のために、信親のために戦ってきたのではなかったか。手を汚してきたのは、すべては妻と子のためと言いついて聞かせてきたが、それはただの方便で、本当は己れのためであったのか。違うはずだ。では、何のためだ。

「今、毒舌では四国一の谷彦十郎も、女好きの羽床資吉も、融通の利かぬ福留隼人も、口やかましい桑名太郎左衛門も、それぞれの地で籠城し、その他長宗我部の忠実なる家臣団は、大軍を相手に戦い続けております。向背常こうはいつねならぬ乱世にあって、家臣団の一族郎党が負けを知りつつ、なお戦い続けているのは、長宗我部家当主の指図ゆえではございませんぬ」

では、何のためだ。

皆、忠誠を誓っているではないか。皆、裏切らず、長宗我部のため

友よ 第9回

に死んでくれるはずだ。

元親は滝の面影を宿したわが子の顔を見つめた。滝と話しているようにも、思えた。

「それは皆が、父上と私の、友であるがゆえ」

友と聞いて、忠兵衛の猫顔がすぐに思い浮かんだ。なるほど、やはり忠兵衛は元親にとって、友であったわけか。信親に言わせれば、長宗我部のために戦死した福留親政も、久武親信も皆、元親の友だったのか。波川清宗さえも、か。主従の絆は、よりよい主が現れた時、鞍替えして終わるかも知れぬ。だが、友情なら、死しても朽ちぬ強固な絆となりうる。

「……友のため、と申すのか」

「いかにも。弥次郎が死ぬとき、私は必ず四国の乱世を終わらせると約しました。死せる友のため、生きてある友のためにも、われらは今を生き抜かねばなりません。これより私が当主となる長宗我部は、友と助け合い、国を治めてゆく所存。皆の笑顔こそが、先に逝った友への餞はなむけとなりましょう」

そうか。元親は誰のためでもない、死せる友たちのために戦おうとしていたのだ。敵味方を問わず、四国統一戦で散った者たちに報いるためには、後から死んでみせるしかないと考えたからだ。

だが信親の言うように、長宗我部の築き上げた力を行使し、四国乱世に終焉をもたらさしうるなら、その時初めて、水泡に帰した四国統一

友よ 第9回

戦における夥おびただしい死が生きてくるとは言えまいか。それは、今なお生きてある友たちのためでもある。

わが子ながら、惚れ惚れするほど立派になった。滝も見ていよう。

元親は、秀吉ごときに従うのではない。誰よりも立派に成長したわが子に従うのだ。

秀吉には子がないと聞くが、信親は何十カ国にも匹敵する。かくも優れた嫡男を持つ元親のほうが、秀吉よりもはるかに運が良く、恵まれている。秀吉が天下と信親を交換してくれと頼み込んで来ても、元親は断るだろう。

元親はにっこり微笑む信親に対し、満面の笑みを浮かべ返した。

これほど心地よく笑うのは、いつ以来だろうか。

「わかった。長宗我部と四国の行く末、お前に委ねる」

「しかと、承りましてござる。これより、皆に伝えまする」

信親は深く平伏した後、美しく立ち上がった。

上体にわずかの揺れも見せず、完璧な胴作りは寸分の乱れもない。

すでに師の桑名を超え、家中一の礼法を会得している。

わが子が去った後、元親は清々しい敗北感を味わっていた。戦に狂い続けた野望の酔い覚ましに、一杯の冷たい清冽な水を飲んで、救われたような心地だった。

やがて濃鼠の小さな影が音もなく現れた。

「るい、ご苦労であったな。最後の仕事を頼みたい」

友よ 第9回

かつての土佐国主はまだ、生きている。

十年前には義父である大友宗麟の支援を得、土佐の奪還を試みて旧領の中村で兵を起こし、四万十川で元親に敗れた。大友家は秀吉に臣従しており、覚えもめでたい。一条家の再興などを持ち出されてはかなわぬ。信親の手は汚させまい。願わくはこれが、元親とるゝいが手を汚す最後の所業であって欲しかった。

「後顧の憂いを断っておく。一条兼定を始末せよ。その後は……信親を、頼む」

無言で頷いて、小さな影は目の前から消えた。

妻の滝以外に、元親が愛した女はるゝいだけだ。

数奇な星のもとに生まれた美貌の少女に強く惹かれた。元親は愛したつもりでも、るゝいはあの時、全く心を開かなかった。だが人の運命とは不思議なものだ。あの固く冷たく閉ざされた心を、後にわが子が開くとは……。

信親が望んだように、これで、四国に平和が訪れる。

まだ「姫若子」と呼ばれていたころ、若き元親は乱世を嫌い、戦のない世を望んでいた。

友を失い続けた異なる道のみではあれ、ついに若き日の願いが叶ったというべきか。なお生きてある友たちと、盃を交わしながら亡き友たちを偲びたいと、元親は思った。

城内で、誰かが愉快そうに笑っている。

友よ 第9回

静まり返っていた白地城に、将兵のにぎやかな声がいつしか蘇っていた。

(続く)